

聖賢伝
 五輯
 三

特
 價
 600
 246



600
246

南總里見八犬傳第五輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第四十三回

君羊小を射て豪傑法場を鬧せ
義士を渡して俠輔河水に投む



却説下田町進、大塚の里老ホと召よせ、卒川菴へついで、墓六が小廝
額藏の夫婦を害し、逆悪既、明白のいんや、又前陣代主後を犯したる。
圓塚山の海より、野の人を殺し、その罪戻一は、あはれ、それより、彼罪人の明日
極刑の處せのさへ、背介のいぬ、自身あつた、これ、今さう、罪科の沙汰は
及び、曩、汝ホは、領措、墓六が、奴婢、ハ罪ゆ、み、墓六、里へ、放遣、せ、且、墓六が
莊園、その、家庫、との、不没、却、せ、る、券書、より、て、進呈、せ、よ、又、墓六、が、妻、の、甥、六、郎、
信乃、との、癖者、ハ、額藏、が、支黨、之、竊、ま、る、往方、を、索、ひ、て、搦捕、せ、ん、め、夫、

許して額藏を救ふ。俺門へその宵のよを認めぬねども、兼て濱路を
娶らんとく、媒妁軍木共侶は、莊官の宿所へ来り酒宴し、夜を深せしむ。此
趣ハ誰とてあぬものか。さあ品草への宛たり、あまよ立あらし、せどいのみか酷
し。証周あり、額藏を不救ひぬ。大塚路の寛狂、争ふとわが、比釋人
あふ志あぬものか。鎌倉へ赴くやと二人、又一人、三人、四人と散動く。果ハ邁
トといのめ、いと言言く、罵駭ぐを里老ホ推鎮めく。入々不平の迹懐、寔ホす
あふす、これども、後今あり、夜を日は、継ぐ鎌倉へ赴くも、往返三十里、餘れぬ。あ
翌ハ誅せぬものか。彼男を救ひて、世の鄙語よめとあり、長比物ハ巻る。い
高た物わらも届く。一虎斃れて一虎進む。簸上殿と丁田殿と、奸曲刻薄
甲乙ハ今鎌倉へ推参り、領主ハ愁訴され、之を用捨へあま、揣さく。大宮
何ハ陣代あり、額藏ハ小厮、主の讐を撃つとも、ささる。此罰ハあらん。況く

あつて証られらる。今速に解んと、其奈れ糸を急よ引く。固く結ぶとく人を
救ふ。身も罪せし、妻子ハ歎息を送る。漫り早りて後悔せし、利害をせし
諭せ。六里人ハ只管は、愠む。是あつて、衆皆あひを、あつて、介程ハ七月二日ハ
あぬ。大が、大塚へ赴ん。この日、已の比及、町進ハ、巷ハ、社平、五倍ニホを、廳ハ、聚會
額藏を誅戮の隊配を示せり。渠ハ、幻術あり、死めしあり。卒川生と、檢監
と、兵三十餘名と、おとく、非非常を、警む。さ、の、里老ホ、が、あつて、と
さ、え、あ、げ、る、事、情、を、察、し、る、日、来、額、藏、ハ、魅、さ、れ、く、切、は、親、愛、せ、れ、ば、あ、ん
どうく、遊行の、ゆ、を、禁、め、く、人、の、觀、る、と、許、さ、り、其、某、も、亦、武、者、汰、し、て、城
外、を、巡、り、心、か、の、ど、く、わ、ら、バ、縦、額、藏、幻、術、あ、り、と、刑、に、臨、て、其、術、を、施、し、
あ、あ、ん、簸、上、生、ハ、兄、の、讐、言、軍、木、生、ハ、其、の、身、の、仇、ハ、あ、の、隨、ハ、刺、苗、也、と、い、
み、た、その、あ、ら、を、お、く、一、袋、及、び、兼、諾、ハ、當、下、社、平、ハ、膝、を、進、り、番、長、の、遠

慮その所以ありあらしむ額藏の檻の獸網の魚之些の法術ありといふても何れぞ
 ありんば元貴意を費しゆひそと誇負を慰れに五倍二倍欣然と欲びて迷列を告て
 ちのく宿所は退りつをさく準備をあらうるかてをぬその日も些一斜ある屠所の
 りど此あられけは急なめを時の教へていば獄舎あり牽出さる額藏は桎梏忽
 りぬ縛の索端短よりる際く追立る五六個の獄卒と三十餘名の夥兵ホの粗麻
 如く圍まき庚申塚へ赴げば檢監卒川菴八を信濃府の夏衣を緘の段々筋の陣羽
 織を装て精好の野袴は純子の裾縁彩を腰高を穿下して紫金作の両刀を
 跨へて綱代の塗笠を短短結戴たる左右は兩個の若黨を後へて鎗柳箱床几を
 ちせ奴隷を後より立先を追していりくゆりゆく程は後方は続く巖上社平を
 これも身甲は釘膺衣を袴の下を裾端折せ打扮をり菴八は劣らば就中副
 佩の二刀は曩も額藏が腰刀の鋭刀とてこれに社平はこれと掠奪りてこの日の

腰は帯をけり故あゆむ件短刀ハ金の華桐あり中へ不梵書の一文字銘ありあて
 桐一文字と名けり便は大塚匠作三成が年来秘藏の有試物とて女兒龜藤取
 せし六龜藤も亦年あつて護身刀をあらうも曩も信乃を撃せんを竊し額藏は
 貸らる間話休題五倍二倍衣袴大刀も道具足ひくこの日と晴と打扮するその
 装ひ社平とこれ一對ありあつて後者短短鎗竹鎗床几と持して陸続とて城を出
 り既あり菴八ハ庚申塚もあらうれば塚と去ると二反許年あり棟の下に
 額藏と牽居るは三餘名の夥兵ホのめく桿棒を突合して祖徠の人と
 禁やうかたれどもあつて觀んを屋棟を跨りて眺望するめい多あり
 當下卒川菴八を床几は尻とらわらむ獄卒ハ額藏を桎梏を釋去て八重索被て
 守てを菴八これと信とてこれ額藏は罪科五逆は當りありて大石殿に
 下知状あり謹て美れといりて呼びて懐より一通の刑書を取て讀みしが額藏

頻は嗟嘆して戦國流李の世ともしども見も月も照しゆ人の心虎狼等しく
 良民を屠殺してこれを名づく法度と善を悪と爲る故に忠義を誣て五逆と
 罵り悪を善と爲る故に奸曲を美と君子と称せむ東海の孝婦誣殺
 せられ遂は三稔の早魁あり杞梁が妻は哭して忽地は城陥まり寛氏の
 天地を動かすその崇速あり汝達ハ是斗筭の小人ありも足るめを後を豺狼と
 めて打城とて大石殿の家風をかへてくもあらぬ縁といはれ果は菴を怒れ
 眼尻逆立ち憎た末期の擬廣言物かいらをそとくいと床几をそめてく焦燥獄
 卒ホハ重括せ額藏が索の端を棟の枝小技けりて力も任と釣揚れば足ハ
 倏忽に地をたおれて六尺あり引登され背ハ輪を負るが如くその死社平
 五倍二ハ衣も袴も袴取り褰げ身軽の打扮物なげ小亀甲入る襦衣の上を
 高脛露して青竹の鎗を袂に挟み勢ひ猛く進み出く西人齊一額藏を左右ハ

丁と疾視く虐賊額藏天罰のかたきとハ今ある国土の爲ハ大犯人れら爲
 中怨敵三年竹の短鎗の串刺受るのや呼びけり痛し死に額藏を屠
 舎の牛羊釜中の魚鼈三寸息絶れば萬事休人天日これがな暗く油雲漢
 陌より走り如く送るものと望るものハ潜然と目と拭み涙の芽が軒端は
 落る玉水吹と疑ふく又樹下の土を潤して葉漏の露吹と怪む一介程は社平
 五倍二ハ會する竹鎗琉々と素突は素扱試つ左右齊一閃と額藏が腸肚を刺
 貫んと刃頭を引く呀と被る声より先ハ五十歩許東西は榴塚の蔭ありく
 両方一度は射を御音箭弦音と共に鳴渡り五倍二社平が肩尖へ揺一揺と
 立俱る矢所を外れは痛むわれは霎時にも堪ば兩人苦と叫び鎗を損を
 倒れる菴ハハあわそもつやと驚たあぐ立ちくとるれがの箭は五六寸の紙
 牌を結提く奉納若一王子権現所願成就と書らるる原来真の征箭か

守を奪て賊を愛はる百姓們が所為をわん疾蒐出して生拘れと声や絞りて下
 知まれはらけんと殿兵共東西は立まらぬと猪塚目々く簇々と走り進んはる程
 射を神箭は皆紛々と射倒れて右往左往は辟易を周章勝ていさく
 當下猪塚推倒して頭れはる兩個の武士東西齊一弓投捨く準備の竹鎗掻取く
 清朗の声高らる茶毒の酷吏騷だせを額藏何の罪ある虎威を借て刑
 罰と濫り私怨より忠義を凌虐は是汝が行所神ハ怒り人ハ恨りされば
 同盟の義は仗て天よ代々塗炭を拯ひ虎狼を獵く人心を快く作麼俺們を
 何人とも本郡大塚以次大塚信乃成孝下總辭我の浪人犬飼現八信道ホ
 あふありとあり弓箭も鎗も王子の神宝今汝ホが五毒の竹鎗との身よびての身よ
 返る觀念せよと罵責く鎗を捻く走蒐れは菴八のく駭騷だく敵ハ箭種の
 喝さる彼より竈て撃仆せと胴声烈しく呼れは殿兵ハこれな獲されよと棒を

うら振る逆進む信乃現ハわめくを右は受左は柱く些も擬議せハ瞬間は五
 六人の鳩尾中腕刺伏より菴八遙よこれをもく敵ハ後ハ兩人はれも獵雄當りか
 禦だもあハ額藏を奪ひ去らるやわん彼奴ををく結果て後をく
 ちるてをゆれと腹裡は尋思し送り竹鎗より揚く遽く棟の舟より近づくと
 打り忽地後方よりありと酷吏菴八具く等犬塚犬飼同盟の二死友犬田
 小文吾悻順あり首をく呼苗る声ハ駭く菴八も阿と魔て飛揚る
 運歩取次まえ九バ信乃現ハ一歳増く骨逞しく色白く肥膏つたる大男
 奉納牌を結下る王子の竹鎗閃して透間もかく突立れば菴八を遠く竹
 鎗をく受り拂ひ具く防戦の程は菴八が若黨と五六人の獄卒あつく応る物を
 らも振て共侶は援手も撃倒人と競ひ蒐る小文吾ハ物ともせハ精神も
 かりて難立馳立進みけりその間ハ信乃現ハ柱る敵をよひの隨ハ八方へ撃散つ

法場を
脇へ
三犬士
額藏を
まろく入



天龍現八

額藏

五倍二

八



大家信乃

社平

大甲小文吾

大傳工轉卷三

七

か片菴八を撃んと。葛直は走來る前向は勃興と身と起す。是五倍二と社平の。この時、なをりまけと、角は立ち、箭を技捨る刀を見りと技連、寄が破らんと立。信乃現八を信とらん、望む、敵ぞと、漏れ、漏れ、東西より大喝一声。嘯て懸れば、社平八現八と刃を、五倍二、信乃を柱に戦ひ、十合に至る。五倍二、合する刃を、曼丁と卷落され、驚駭、睨て逃入るを脱し、遣り、背より腹に斜と刺貫く。鎗は縫れて、轉つ、輾つ、頻々、同苦む。せ、依地上は、縫苗、今を、復、伯母の仇、あつちと罵る。技く、尖地、大刀、風は首を撲地と、撃落せ、社平は、舌を掉る、刃を引く、逃走を、現八、透さ、追詰て、敵伏せ、刺殺して、内、逃、お、殿、兵、お、縦横、無礙、追拂ひ、信乃、の、額、藏、を、樹上より、扶下して、傳の、索、釋、捨、と、現八、亦、引、え、社平、が、兩、刀、を、分、捕、して、額、藏、を、遞、与、る、介、程、は、小、文、吾、に、挂、若、黨、獄、卒、と、一、人、も、漏、れ、刺、伏、せ、菴、八、も、あ、ち、と、教、介、所、の、深、痕、を、負、い、ま、れ、逃、入、り

走りの、矢、庭、は、倒、れ、死、て、多、り、物、員、を、ぬ、奴、隸、を、と、り、逃、去、て、あ、敵、の、あ、ち、あり、う、小、文、吾、も、鎗、を、捨、て、樹、下、に、聚、合、し、程、は、信、乃、の、額、藏、を、勦、り、危、り、大、川、生、か、う、又、人、の、一、朝、を、説、盡、さ、う、大、お、辭、我、殿、の、御、内、人、犬、飼、見、我、衛、老、人、の、養、ひ、子、和、殿、も、豫、に、相、識、さ、る、古、人、棟、助、の、実、子、の、犬、飼、現、八、信、道、に、彼、下、總、の、行、徳、人、古、那、屋、文、五、兵、衛、の、長、子、の、犬、田、小、文、吾、情、願、之、の、兩、友、も、是、れ、等、し、此、處、あり、彼、王、と、り、目、來、り、某、を、相、助、け、あ、は、和、殿、を、拯、れ、歡、び、は、は、引、見、ま、額、藏、の、恭、小、膝、を、つ、た、某、何、ホ、の、天、福、あり、秋、萬、死、を、ゆ、く、一、生、を、保、つ、幸、ひ、の、か、此、の、馬、傑、達、を、面、を、接、せ、り、日、あり、か、愛、顧、せ、れ、併、犬、塚、所、の、鴻、恩、は、あ、り、他、日、の、事、わ、身、を、殺、して、驕、か、も、あ、り、嗟、ら、ぬ、と、欲、び、を、述、義、を、美、し、て、感、涙、坐、り、叱、り、現、八、小、文、吾、慰、め、俺、們、も、亦、幸、ひ、和、殿、と、兄、弟、と、死、宿、世、あり、聊、死

力と盡せし素より義の仗る所なりつべく恩と死をば社平五倍二
 菴八ホが残毒の竹鎗へ天理人望は違ふを和殿を害はるとも彼を還て
 竹鎗は縫れて命を損せしと王子の神罰をばれ曩は俺們相謀て和殿を
 拯んと欲せしは長の器械はあり王子村の母より農家より器南ぐ鎗と
 弓箭を買とりて大敵を殺崩す今この地は要なりとて戸田河をうら
 渡して鄰郡を退くべし誘ふと急ぎ額藏をも感佩して信乃現八ホを先
 立つ西北の足をも走去ると六七町も十町も過ぎりけり浩は犬塚より新隊の
 雑兵二三十人塵埃を揚揚し追蒐するを嚮は逃去る奴隷ホが城を還りて云を
 報し六町進驚た疾行の雑兵よとの癖若を撃つと頻に下知を傳へる
 食鳥銃を携り既り城兵ホのや四大士は近づき箭来程あり隨高
 頭を揃へ連掛て火蓋を切るとは打ちつ俄然とて降るぐ夕立の雨繁を

素して忽地火繩を滅さげ城兵ホの暴雨は度と失く且く打
 擇り程は東々然と鳴ると疾雷は電光して雨烈なり城兵はつと
 騒ぎあふ雨を避んと食樹下は立寄る頂の上は霹靂と天地は響く
 一声の雷火は震れて死するものぞとて教とあはれ震死を脱れし
 共信は氣絶して枕を伏する四大士再度の追捕は脱れしとあひし
 四下の松を箆盾を取て身へ濡る敵をば天雷の祐はあり力も用ひて
 夥の敵兵とびはれは是九事なればと滝野川と王子の神を遙に祈るなり
 戸田武運を黙禱して齊一間道と走り戸田河を渡れば雷は収り雨も
 細りく黄昏は近かりとて前面へ渡るとは彼此とては戦国の習俗
 中領主の嚴禁われは渡船絶く況く雷雨は水陸の入迹稀ある打
 中あはれ便船せん中船をんをいふと皆氣を伺て東へ走り西へ赴死

おかど河原を幾遍と行く。往返は果一わりのけを。かど一程は町進の隊兵百五
 六十名をねく馬を飛して追蒐。遙き声を仰り立て。虐徒悪黨走るとも。今人脱
 るは路わらん。汝も種々の幻術。或ハ王子の神助。假托。或ハ猛雷雨を
 起して。夥の士卒を殺せんと。れ亦非常の備あり。再度の追兵を遣はる。心
 心のあま。時を移さば。多勢をねく。みづろあま。追詰れば。袋の物を取ら
 易が。みねを束縛。とくく受と。呼と。バその隊の士卒共。声合して。突と吐
 と。揚らる。四天士ハこれと。えく。河を舟あり。陸中敵あり。進退あま。谷りぬ
 刀の刃の續ん限り。まが命のあん。際り。あひの隨。戦く陣。歿るあり。外は志平。
 命ハ是。義より。鴻毛より。質輕。同盟同日。同時に死。故願。祈り。行の
 工も。黄昏。道のぬ。ハ躬方。幸ひ。備を乱。さ。ち。寄。せ。奇。を出。て。中。せ
 割。え。目。ハ。雙。敵。ハ。丁。田。の。人。馬。の。足。を。立。を。を。送。は。諫。奨。して。必。死。の。覚。期。勇。く

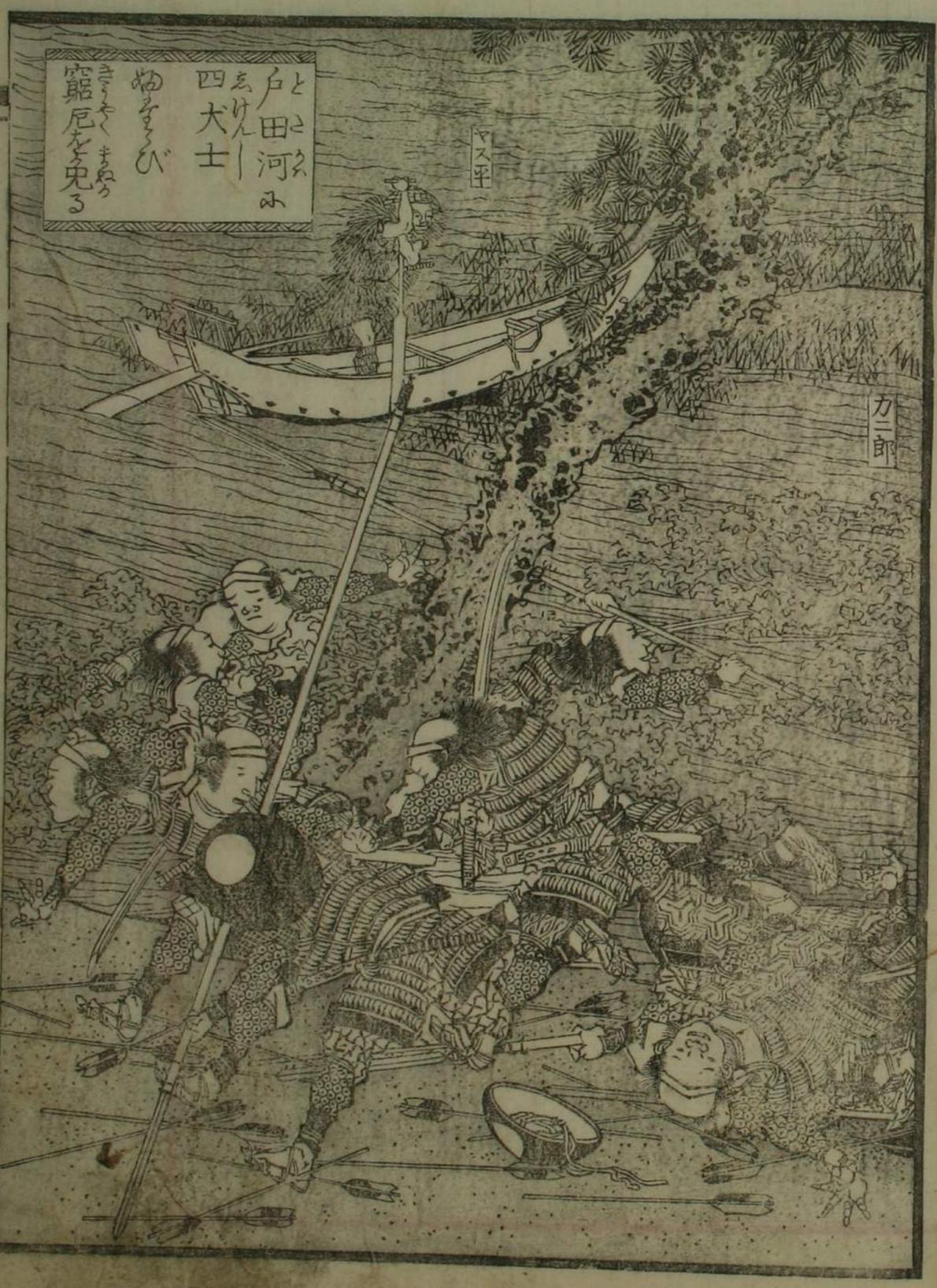
近づく。敵を。あ。折。り。誰。と。あ。水。際。の。繁。葉。高。蓋。を。あ。漕。ま。る
 一葉の舟の。あ。る。名。秋。の。川。を。誰。と。あ。歌。ひ。あ。の。岸。へ。を。く。船。を
 招。け。の。あり。四。天。士。これ。を。う。て。彼。も。敵。歎。と。訝。は。葉。笠。著。る。一。個。の。舟。邊。く
 一毛。可。惜。命。を。捨。ん。より。と。く。と。勸。め。ら。る。神。宮。の。借。平。は。以。て。れ。信。乃
 現。ハ。文。吾。ホ。ハ。の。人。の。を。を。知。り。天。の。祐。と。霎。時。も。猶。豫。せ。ば。額。藏。共。侶。身。を。跳
 け。て。船。は。閃。り。と。う。も。衆。れ。が。借。平。ハ。權。を。と。り。伸。く。岸。を。を。あ。れ。く。め。く。船。を。返。せ。復。せ。と
 呼。け。る。町。進。ハ。真。先。は。水。際。ハ。馬。を。騎。居。く。鞭。を。抗。つ。招。け。も。借。平。ハ。耳。を。な。び。を
 船。底。より。葉。笠。を。四。ち。り。と。取。出。し。て。四。天。士。は。遠。与。し。の。ち。折。り。逆。風。か。れ。ら。う。ぞ。う。え
 漕。と。も。速。わ。この。船。を。前。面。の。岸。へ。を。く。雨。ハ。や。る。霧。ハ。も。敵。の。箭。を。禦。ん
 為。と。く。く。な。れ。火。と。懇。は。勲。見。バ。信。乃。ホ。ハ。の。く。勉。び。も。あ。ひ。子。を。借。平。也

吾當此の危窮をのりて知るも神速微妙の授けをよとて、やせへのいふあり 稽平含笑もつちのりて、エトコ 八理りの刀禰們のいぬる比小人居宿所を辞し去りて南を望み赴たぬ。道程心りてあまふ竊跡を跟く適しは刀禰們の杜岡の隅より、あまふ 要時慈ひぬひたその折の密談を圖らむも竊案のみを同盟の義よりて額藏を捉んと。死をぞも辞せざる武勇謀畧滝野川の辨天堂を旅宿せんと相譚ぬ。その智その勇大なるぬ雋傑達なりと認め、みちり 憑く又慕ふ所も一内あまふ宿所を還りてあまふ彼人々額藏男を捉らんと謀るとも城中の守禦嚴重なれば獄舎を潜び近つて竊せんとはかたきくべかれざる刑罰の日法場を劫して奪りて走らんと謀りぬ。不敵の豪傑なれば本意を遂へハ必定なれば其処より城へ遠くぬを再三夥の追兵を遣り寡衆を敵かこ縦追兵を殺し崩して且くは走るとも近馬この戸田河ハ渡船稀なればあまふ

至りて追詰らんとし折は極む可憎義士を殺せんとあひまれば密々不滝野川へ赴たるとの進止を窺ひ又大塚へ赴たると刑罰の日を同定めあまふ船を彼処より奪り刀禰們を俟たりは俄頃の雷雨は黑白を別むを刀禰們のあまふと水際を徘徊あひけんとも知りぬと且くも物とあせしめ今此遅かり敵は啖肉のれつて危かりと村膽の心の誠と死諦と信乃現ハ小文吾ハのちあまふ感嘆と稽平が任侠義胆を額藏は告るも額藏も亦感佩しくその恩信をぞ感ずる既して船は稍北の岸に著るも四十六曲々も欹びを演るも暇なく稽平と見たりと皆再會を契つて馳々水際を立ちけり介程は町進ハ士卒共侶も吉を揚る頻に船を呼禁れども舟人ハ受ぬ態も亦漕之をべくもあまふ鞍壺敲たて敷圍悍く彼射て捕ると下知れれば雜兵九四五十名あまふの岸に立並て前継早は射被れども前遠なれば前ハ徒も水中に



尺八



戸田河内
 四犬士
 物をもひ
 窮厄を免る

マス平

力二郎

事情の變じをあらわす。と訝しくいふ。ハ、借平微笑く彼ハ、曩か昔より力二郎
尺八ハ小人既ハ老れれば、かの副ハ相譚、血氣ハ早らぬものも、豊嶋、馬、両家の
為ハ、怨を復さんとあきらめられた大塚の陣番、ホと云、憎むを甚しうて異議なく
同意して、彼ハ、蘆原ハ、躲て、機ハ、臨ミ、變ハ、心して町進を、撃、捕らうといふ、信乃
ハ、撥馬、驚く、あつ、又、彼、兩、勇士、命を惜志、難ハ、代る、我、ホ、為、ハ、恩、人、之、あ、ら、も、是、出
いと親、族、ありと、歎、き、陣、歿、其、悔、も、甲、斐、也、その、歿、危、也、他、ハ、讓、り、て
苟、も、免、れ、ハ、勇、士、の、せ、る、所、あり、俺、們、も、亦、これ、を、恥、その、船、を、疾、走、ハ、再、舊、の、岸、
渡、して、生、存、とも、死、者、とも、安、危、を、彼、人、と、共、せん、今、ま、躊躇、と、云、ハ、言、葉、等、しく
急、せ、借、平、頭、を、も、掉、く、否、この、船、を、寄、走、ら、ば、義、を、ん、く、勇、む、ハ、力、禰、們、此
志、あ、ら、ん、れ、も、彼、ホ、が、敵、と、戦、ハ、力、禰、們、を、落、え、為、然、る、と、再、彼、處、へ、渡、り、く、復、ハ
陣、歿、あ、ら、ん、此、彼、共、ハ、み、カ、益、が、ら、ん、と、云、ハ、社、校、共、ハ、町、進、を、撃、捕、然、我、ハ、死、ハ、深、ハ

して、遂ハ、命、を、隕、れ、せ、ん、匹、夫、の、勇、士、を、是、非、を、れ、や、ら、ん、棄、て、落、れ、さ、ざ、れ、彼、ホ、小、人、
只、狭、氣、を、旨、と、て、今、刀、禰、們、を、救、ハ、あ、ら、ん、世、の、豪、傑、と、あ、ら、ん、命、ハ、換、て、頼、人
と、欲、び、この、われ、が、そ、ハ、委、あ、せ、し、状、を、音、音、ハ、届、あ、ら、ん、彼、ホ、が、う、小、人、が、あ、ら、ん、
定、り、あ、ら、ん、べ、い、今、刀、禰、們、を、渡、し、追、兵、を、禦、留、れ、ば、れ、ハ、神、宮、へ、還、り、か、し、
況、彼、社、校、ホ、を、先、亡、と、あ、ら、ん、誰、を、便、著、ハ、立、潜、び、く、餘、命、を、何、處、ハ、貪、ん、だ、ん、ぞ、
限、り、の、浮、世、を、豫、て、覺、期、を、究、や、ら、ん、然、ハ、この、船、を、あ、ら、ん、流、さ、バ、刀、禰、們、の、又、渡、ハ、免、
ゆ、ハ、敵、ハ、ど、し、れ、ハ、船、ハ、共、ハ、身、を、淪、く、赤、心、を、頭、に、下、ら、ん、と、い、ひ、ん、ん、ぞ、
河、中、へ、漕、知、せ、ハ、四、六、六、は、ど、し、れ、且、感、ハ、且、驚、く、水、際、ハ、足、を、翹、て、等、ハ、借、平、
更、い、つ、趣、理、り、あ、ら、ん、更、ホ、三、人、を、死、し、何、地、へ、落、ら、ん、死、ハ、何、い、ふ、と、あ、ら、ん、船、を
枉、く、且、く、あ、ら、ん、異、口、同、音、ハ、呼、禁、れ、ハ、借、平、ハ、心、も、せ、河、中、遙、ハ、漕、退、け、豫、て
准、備、を、あ、ら、ん、船、底、の、柱、を、引、抜、捨、れ、ハ、船、ハ、底、より、水、入、り、人、を、乗、せ、ハ、忽、地、ハ

波の下を沈むける四犬士ハ法然とつる目届ぬ薄暮に戦ぐ蘆の葉さへがら
 前面ハ修羅の大刀音矢叫びあせりハ火を河風ハ澳より黎む宵闇の其処と
 ころびかりやうかきしかども四犬士ハ捨て走り忍びどくハ厚帳然と立
 信乃ハやをくむひえハ忽地ハ声を獎して時を命あつた必死を極め
 俺們ハ西三度危窮を脱れて多ひ子ハ猪平ハこの河中に投て死せり且西勇士の
 存亡も目今ハひ定めざらん然バと云云ハこの小節ハかづらひく河原に立て曉
 死する人の返るあはれ勇士を援け為すわが猪平が俺們ハひ送せしむ
 荒茅山まで赴うバ恩は答るあはれもあつて誘ふ人々ハ通宵走りく兵異を
 料んごとくと誘ひ立れば現ハ亦小文吾も寔ハ然と領たる中ハ額藏ハ遙ハ
 信乃をええくハ彼樊噲が大功ハ細謹を顧ぞ大礼ハ小讓を辞せと決ひしを
 猪平が水勇士のくハ尤惜む勝れども水を隔てどくようち歎けハ

それもげは女々しかりを相愧て現ハ小文吾共侶よろちつれ立く野干玉の
 闇ハあれど猶も世をあのあ似る若しハの蔵のくま赴けたり

第四十四回

白井の郊外ハ孤忠雙言を窺ふ

走るのハ路を擇おど貪たりのハ妻を擇おど餓らるのハ食を擇おど寒たりのハ
 衣を擇おどその時と勢ひと人情とくかくの如し程ハ信乃額藏現ハ小文吾ハ
 上野信濃を心當よとの終夜間道あり只管ハ走れども比ハ七月初の二日黒白も
 別ぬ鳥夜ハあはれ邁と五里許のく勿心地山路ハ迷ひ入りくころく程ハ天ハ
 明くころれハあはれ名もあはれ高山の半腰ハあはれ
 帯の間ありして西北のくを直下せ寂らる人煙迫ハ見えたりハ内彼此と徘徊する
 山ハ荒らる神社ありて華表ハ掲一匾額ハ雷電神社といハ四六字ハ内定くあは

讀れり信乃つづくと瞻仰し諸賢へも言ひ及ぶと云ふ桶川の東南あり雷
 電は疑ひを被方より人煙は是桶川の郷なりきの六ひひもくも庚申
 塚のありて神雷の落りて夥の追兵を拉れりハ世は稀なり天恩かくて
 昨夕の途に迷ひて今も雷電の社頭より天の明く因あり縁あり奇なり
 只子有理と額藏ホ三士も齊一瞻仰し且感し且尊し石湯を掬ふ朝浄水あり
 社壇も額つて俱に祈念を凝しけり且して四大士樹下は退たり又彼此と云ふ
 神社の背に桑樹多かり菜萁楊梅も少くぬみみあき熟して半ハ落り馳て東と
 菜萁を採て飢は充る小甘菜と九常は過たり忽地は疲勞を忘れて心地清き
 朝日影遅れが樵夫牧童やも勿遭は鳥ハ緑樹に
 隠れて声のく高く雲ハ青亦山よ起りて追ひも定らざ現静け山の徳あり
 名山靈峰がれはれは時よりその佳境を皆共侶も嘆賞して或ハ石も尻とけ

或ハ朽幹は身を倚りて送は相譚ひ慰めけり當下額藏ハ茶しく貌を改りてきのわ
 夏の慌へて曲は欬ひを演じりあは人迹稀れが密談も究竟あり胸臆を
 盡しべし犬塚ぬハ何の故は許我も苗りぬら況天田犬飼の両友を相伴て某が
 必死の厄と極ひあひり為体不思議とのやあまりありつめあひぬと云ふ
 信乃ハ含咲てあつちりハ理り某も亦許我も免れぬ大厄ありこの故は下総の
 行徳は流浪つゆび危りる幸あり三四の豪傑身命を擲りて遠に窮死を
 釋れりその故ハ箇様々々と被村雨の刀此失せり又現ハと組敷りて滾て船は
 落るり文五兵衛と小文吾がり妙真房ハ夫婦がり大八の犬江親兵衛がり大
 法師と蛭崎照文ホがり伏姫の縁故珠教のり八房の犬のり安房の里見も宿因
 ありその際略をた示せ現ハ小文吾も送代も漏るを補ひり額藏ハばく毎に駭
 然として物驚り潜然として歎く房ハ義烈ハ親兵衛が幼穉しく犬士は

一人を喜してとありてくあも文五兵衛妙真ホ心操の大きかぬと嘆賞して
 声と斬む且大が二十餘年の行脚の勤苦又照文の母の爲に從弟照武が子ありて
 その宿縁と感悟して哀歡交つて禁せむらんや亦現八小文吾が孝順義勇を奉
 愛しての骨肉の如く多りとの死信乃ハ又のある某行徳はあつて一日八舊里の凶
 變を夢やとも知らざれば竊に和殿は對面して事の趣を報んとて犬飼生共侶は船にて
 犬田は送りて神宮の岸に著し折漁者積平は呼出られしとて伯母夫婦の
 横死と和殿の忠勇非法の禁獄詳は後述すこれより犬飼天田と密談して滝野
 川あり辨天堂は七日許参籠して云云と謀りて遂に和殿を拯ひ均し加梅積平
 尺八力二郎とやんが援あり既ありと恙なく四支面を接せしめ款び何物もな
 べにあら里見殿ありして微聘の沙金之延崎生の懇意の隨に某且く預りたる
 受納めぬひとのひさげと懐の財布を撈り下包の沙金をとりゆき遠与よなん

額藏ハ謹く受けては左右あり納む某のまゝ里見殿は一介の功も和君達
 とを属日あり某が故をとり纏腰の費多かめ是りの後進退ハ和君達と共に
 ちある財を分んとし本意はあつたこの終に犬塚ぬい領をとりびかか
 推辞ハ信乃ハ頭を掉し刻頭の交りハ送し介意あつた某も和殿の爲に延崎
 生は辞ひしやと云云の儀ありて巴下をゆき諾ひしその功を皆和殿に賜
 物ありとれは悪く預措べにこの後纏腰をなくすは送し相資人の財を分つと
 ありあゝんや曩も彼殿の懲聘を且く固辞せしめ同盟全うし納めぬと
 と諭され額藏ハ遂にその意は仕りし沙金を懐に挟つてむき嘆息して現只今
 玉の文字はありて我もと過世似るもの人ありて死しては和殿の子
 との既ありて五人に就て又一奇談あり曩も某は虎も圓塚山のはらむ二個の
 犬士は撞見しその故ハ如此と信乃は栗橋ゆく別れ日千住より日の暮れ

〇みち 〇あまのこおつうわま 〇おぎをりのさもどらう 〇むらさめまか 〇さかき
 〇ふみぞ路をとり誘て圓塚山を過る折左母二郎が村雨の刀をりて濱路を
 〇殺を條より天山道節忠與が左母二郎を砍倒して濱路と名告令りり且
 〇濱路ハ道節が妹ありりその父のり母のり濱路が節義道節が孤忠一五
 〇一十を竊聞せりその趣又道節ハ村雨の刀をりてと君煉馬倍盛の仇官領
 〇扇谷定正と狙撃んと多あり濱路が需志せりり濱路ハとつ休息
 〇絶一と道節が火葬せりり鮮果て額藏ハ村雨の大刀をとり復さんく道節と批
 〇戦ひ折守護袋を道節が刀の鞘をかめりて遂は渠取りてり又道節が
 〇肩あり瘤を一撃と擗と砍一と金瘡口より飛散る玉の怪くもさかみ入りり
 〇彼玉をり換りり玉の中を忠の字ありり道節ハ火道の術をりて竟は逃れ去りり
 〇介後額藏ハ左母二郎が首を木の杪に斬梟て云云と書送せり濱路が乃人の
 〇猜疑をありせりりそのさかきりり町進ホが唇を資りりり大約事此

〇顛末を曲り告て又のり某禁獄せり日水火の苛責痛楚は勝は心地死ぬべし
 〇疑入りこれ亦奇妙といひりこれ更と遠く髻の中を藏りり玉をりり示せり
 〇信乃現ハ小文吾ハ共侶これりり嘆賞声を合りり當下信乃ハ依然る臉を
 〇身を捺れバ杖瘡立地は愈てり痕もあかりぬこの故は町進ホハ法術ありり
 〇九人ハ権者の後身ともいひ死致あれどもその終焉の為体をりり痛
 〇且阿沼蘭といひ濱路といひ才貌節義の世は捷れも廿歳のうへを起りり皆
 〇これ非命を終を取りり不幸れり甚んハ且濱路が真の親ハ煉馬家の一老臣天山
 〇道策ハんわとの素生の賤ハかだ某曾彼女子の標致十二分の趣わりり婢娟ありり
 〇惜むるありりその節義ハ勇猛ありり婚姻の期は及びり一夜の情は被りり某が

犬も縁あり形は且力カニの両字を轉倒せれば便是方とあり又尺の字の上とされば
 便是戸の字あり又これを全聚すれば房の字とあり又尺の字の八の字を房の
 上と冠すれば八房の三字と成る強牽傳會は似れども亦是犬も縁あり形は後よ
 かり因縁の定りありありあり今之急務はありは且く度外は措ねば意は
 妙論は小文吾もさう額藏も現は只管は感服ととの才幹を稱するかく又
 額藏は腰刀を右もさうこれを信乃は示してのやうきふ度申場のはさうも
 犬飼生の精悍は社平が両刀を分捕して某は既り死す糸の折れがさうも
 心つらうと今朝もさうさうさうこの腰刀は比栗橋の宿りあり頼み和君に
 せせらぬと桐一文字の名刀といぬる六月十九日の夜簞上宮六と敷き置て五倍二
 疾を負せしこの腰刀をめてせう某囚徒とあり比社平が掠奪するわんかくて又
 循環りて某がさう落さう亦は一奇といふべし考れどもこの桐一文字は和君の祖父

近作ぬ先祖相傳の名刀と電篠の授けり来歴云々と定りありはとありは
 和君の爲に茂陵の千金これはおほの何うあるん某は社平が刀あり一口あり
 事足れり彼村雨の名刀は道節がさう落れが今請復せしむ先を和君に譲る
 らん藏り也ときある信乃は欣然として左右のさう受取てさう義ありは
 犬川生は伯母附屬の刃をさう當座に仇を撃つてと羨むは績は某許我は
 危難の折大刀を喪ふは腰刀をえ打打れは行徳へ著一日の腰は寸鐵を帯
 ざうと大田生があらあり所藏の両刀を贈りゆひは五倍二を敷き置て鋭鈍を
 試し小現技羣の鋭刀あり鞘は金の臥龍の又紫金魚子は金の雪條を置
 たるもの両刀の表装一對は既この両刀あれは事足さう也ども桐一文字は先祖の重宝
 有繫を捨るは厚意は任してこの腰刀と相換て骨は帯べし考れどもさう
 進めん納めんと正首もさう腰刀を贈りゆれば額藏は受とてさう眉根さうも

信乃父腰の大刀を奪ひて右に接取て大川生々々この大刀を奪ひ物
 社平が大刀と換へ桐一文字を惠れれば一刀の事足れども和殿のあちを
 休る為之武者の戦場は敵を撃つる分捕の剣戟をその子孫は儲とば子孫以面目
 其社平を撃たれども五倍二と名の悪等た渠も讐敵の半隻あればとと
 腰にせん古入觸腰孟の境猛は勝れどもありのつと勸を額藏ハ辞せし
 西刀俱は換て有り現ハこれとん之の入義を以これ贈る人又義を以必酬か大田生の
 牽出物大塚より大川と三傳と舊返り世の人ハ只眼前の利の走り義と疎
 あり酒食の支の生涯信交遭ぬぬ今三刀の奇遇とんその宿因の
 深知と知り候へく子孫の美談とせんをせしと顔は稱賛ありく額藏
 某諸賢の助ありて萬死と復せしをわげやうして小厮の苦役を
 免るをせぬ有りむ総角あり比竊は犬塚ぬと謀りて名字を莊助義任と

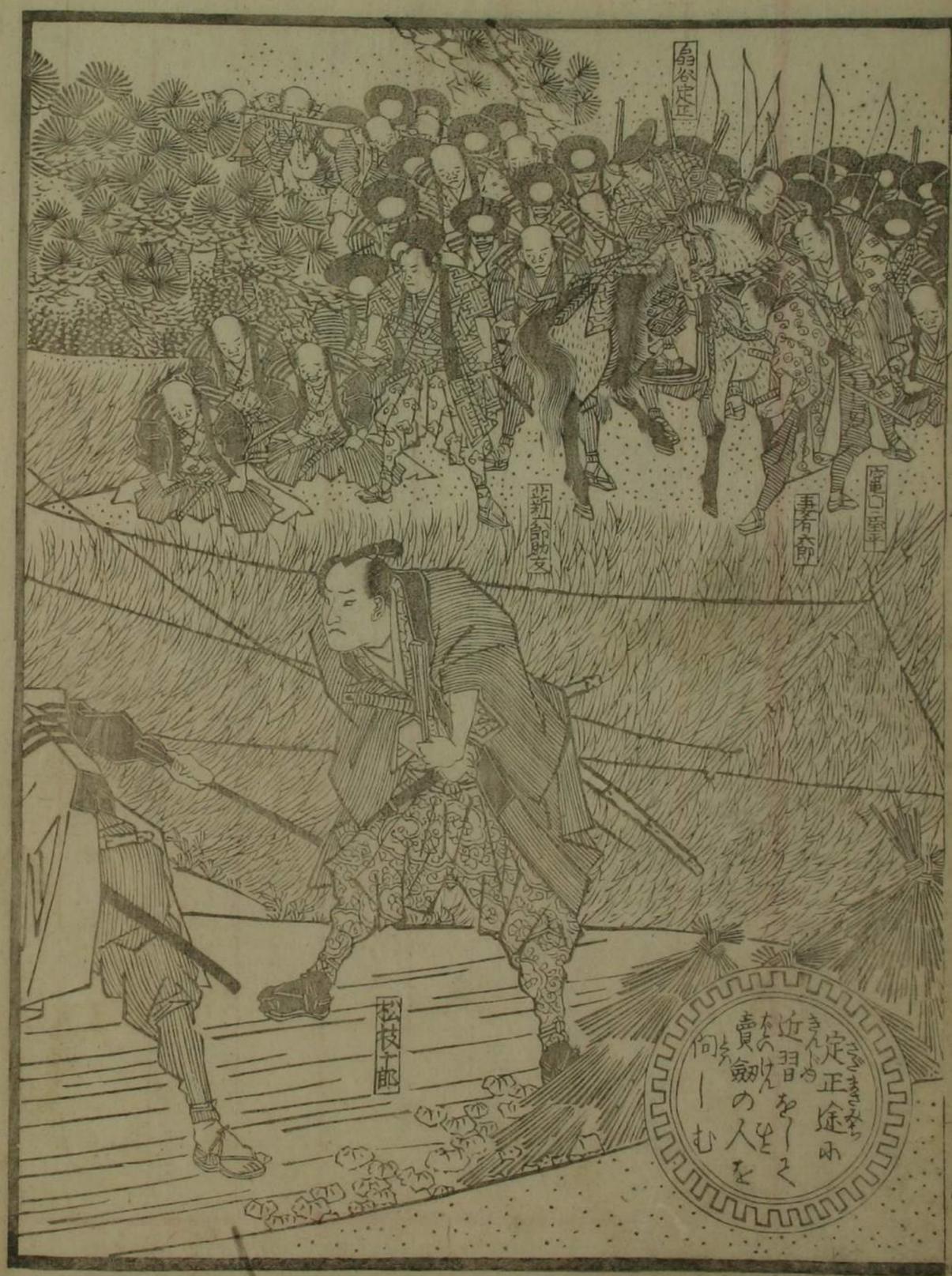
改れども主の莊官は憚て世中披露せざりて今も父の像見の両刀を惠れ
 額藏を改て大川莊助義任と稱ふ額藏と莊官の漫る名つけ一字之今
 不祥の義あり額ハ則比太死と訓を額ハ頭をのめり額藏と熟れ
 額藏と訓をりて世を潜ぶ貌あり又死人の幘目は似り果して不測の罪をぬ
 世とあがをうてけれは莊助の莊あり助ありと改名の趣意かくの
 如くは衆皆諾ひくありと云つこの日ありて額藏を莊助と稱する商量
 既果一信乃現ハ共侶小文吾も對ひて曩もあかく勸めりどく
 和殿ハ行徳へ還りて假初を送りて九日ありあり家尊の大人妙真も
 持てあらん人加禰前諾せし大道德と蛭崎生よ約を違ふは快く
 大川生と極ひぬれは遺憾死ともありて還りて促せし莊助も亦意を演
 俱に帰郷を勸る小文吾も後をいつく趣ありあれども行徳ハ母異りてあれ

荒安うら荒芽山をて送る由はくありて後、袂と分ん世の鄙語をいれ作る
 ても易く魂を容るるとハ最難しといふはあはれ始ありて終ありてよ大丈夫とを
 へりて、○やまへい 稽平が云云といひつともあはれを荒芽山之光景にいつかんとみ果はりて
○たかひ 此の処より歸去らば彼佛を作まじし魂を容ぬは似たり再を勸めぬとて入て推辞
○まのら 信乃ホも遂にせんまあきとて、○おが 軀てその意に任しけりか、果に長談は秋の日影の
○まけん 傾くと覺ぞ下晡ありて、○たかひ 四犬士ハ又商量して、○たかひ 凝浮世をあぶるとこの深山は露
○まけん 宿せハ猛獸毒蛇の愁もあらん、○たかひ 今宵ハ桶川に宿投す、○たかひ 是とて齊一身を起して
○まけん 又神垣をぞ伏拜む、○たかひ 別雷の名を負ハ武運ハ甘雨の降るとく、○たかひ 武名ハ雷霆の轟く
○まけん いく隈をく天の下りも播き、○たかひ 雲とあはれ、○たかひ 霎時黙禱して又彼の木果を拾ひて
○まけん 飽まで腹よみつ栗の中の細道踏み、○たかひ 桶川の郷へ下りけり、○たかひ 却説信乃莊助現ハ
○まけん 小文吾ハ次の日、○たかひ 旅宿を夙よ起き、○たかひ 笠深くてゆく程はさしも急ぬ旅われハ世を潜り、

○たかひ ささかむ名所を、○たかひ 山水を、○たかひ 一宿二宿と日と、○たかひ 弥りつ、○たかひ 月月初の六日、○たかひ 上野国
○たかひ 甘樂郡白雲山明巍の神社を参詣を、○たかひ 明巍、○たかひ 今ハ、○たかひ 若夫明巍山ハ白井城の北隅に
○たかひ 在り、○たかひ 其西北の、○たかひ 碓氷郡を背の、○たかひ 同郡の荒芽山と南北は相對へり、○たかひ 僧正尊意の
○たかひ 所、○たかひ 南朝名臣の隠る所、○たかひ 歴々として古蹟存焉、○たかひ 千年成、○たかひ 阪澄ハ二十有八層あり、
○たかひ 百六十層あり、○たかひ 四阪五坂升降を、○たかひ 深谷の地を帯り、○たかひ 崖岸の状を、○たかひ ええれば、○たかひ 鑿是
○たかひ 穿ゆるが如く、○たかひ 高嶺の天を、○たかひ 横まみ、○たかひ 崗巒の勢を、○たかひ 仰げ、○たかひ カカして、○たかひ 削るるに似たり、○たかひ 煙
○たかひ 霞の子細、○たかひ 泉石の分明、○たかひ 実ハ天上の靈奇あり、○たかひ 人間の妙絶、○たかひ 之の神、○たかひ 殿、○たかひ 接を
○たかひ 咨へば、○たかひ 地主神を、○たかひ 波古曾と、○たかひ 稱け、○たかひ 本社を、○たかひ 妙義権現と、○たかひ 唱め、○たかひ 隨身仁王、○たかひ 總門あり、○たかひ 神明
○たかひ 宮、○たかひ 日本武天、○たかひ 満宮、○たかひ 稻荷神社、○たかひ 辨才天、○たかひ 飯綱不動、○たかひ 觀音、○たかひ 聖天、○たかひ 大黒天、○たかひ 金毘羅、○たかひ 入磨、
○たかひ 禿倉あり、○たかひ 本地神、○たかひ 樂護、○たかひ 摩摩の三堂、○たかひ 僧馬掛の四阿あり、○たかひ 香水及菅公の硯水あり、○たかひ 我
○たかひ 擧るる違あり、○たかひ 神、○たかひ 殿、○たかひ 佛、○たかひ 堂、○たかひ 上、○たかひ 久て、○たかひ 戦國、○たかひ 流、○たかひ 季の世と、○たかひ ども、○たかひ 乱、○たかひ 妨の禿、○たかひ 徒あり、○たかひ こと、○たかひ 於、○たかひ 又、○たかひ 其の

君父の怨を復さんと謀るとありては、彼を推量するは、大川生が見る武士の
 道節を疑ひ、誘ふ下向して白井の邊に趣く、萬が一彼人は環あふともあべ
 どくくと急せ、莊助現八小文吾ハ一議及ぶと同意して、其は又領地あり、
 立ち足引の山本見え、くわの遠に千々の石階落も、如く足信して下向せり、不
 管領角谷修理大夫定正ハ近属山内頭定と不和あり、ゆり猛に鎌倉を退けて上野
 白井は在城を當国より信濃越後を定正の采地を、人を馬を調煉して
 不虞に備へん為り、これあり定正ハ五日の早且あり、砥沢の山は狩競し、
 明の六日の申の比、白井の城は回旋を定正の日の打扮ハ紋紗の狩衣は精好の袴
 豹皮の行膝穿て、金作の大刀は虎皮の尻鞋を、腰は跨へ八分反の武者笠を
 戴は、奥州驪の太逞馬は紅の厚總掛く、磯馴松は月と衝を銀の磨白は
 鞍四下羞明く、皆具して紫の鞆、緋の馬に優は歩行せり、相後ハ近臣ハ

巨田新六郎助文、龜門玉宝平五郎、妻有六郎之通、松枝十郎、貞正、後類、九
 二十五名外様の若黨五十餘名、又弓箭鳥銃を肩おせ、雑色奴隸に至る、
 毛舉るに違あ、殿の列卒は野豬鹿をどくくの獲物を、扛擔し、
 前駟後後の目さ中、く五町あり、續けた、既に定正主後ハ、白井の
 城を、二十町は足らぬ道の程の並松原を過る折と、れば一個の武士の浪人
 皂蛇皮絹の単衣の申時、をり、被る編笠を、あ、年か、
 道の、く、左の、年、松の下の、葛石、尻を、右、口、
 大刀、推立つ、忽地、声、立、世、千里の馬、
 伯樂、の、今も、鑊邪、が、劍、
 刀屠兒の肉、俎、を、乗、せ、れ、を、農、婦、は、鍋、の、炭、を、撥、入、恨、む、
 一、七、頻、り、お、り、け、る、前、走、の、雑、色、兩、三、人、見、
 一、七、頻、り、お、り、け、る、前、走、の、雑、色、兩、三、人、見、
 一、七、頻、り、お、り、け、る、前、走、の、雑、色、兩、三、人、見、



大傳三輔巻之

山崎堂藏

